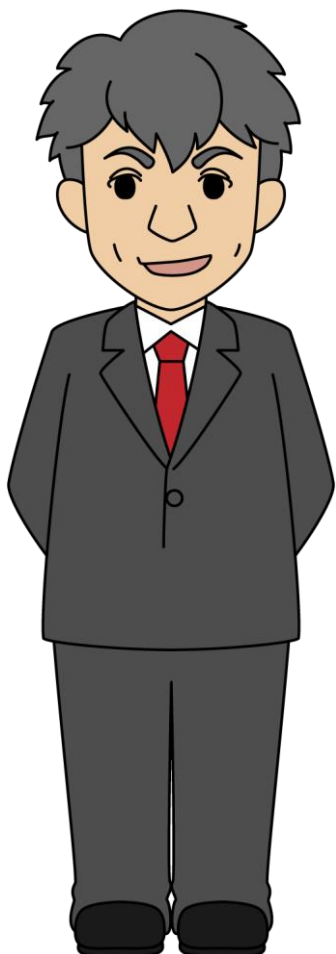




中世文書を読む(十三)

もうりし
毛利氏の仮名書出
けみようかきだし

今回は、毛利氏のもうり仮名書出けみょうかきだしを紹介します。

けみょう仮名とは、文字どおりかり仮の名前。

じつみょう いみな実名（諱）とは別に名乗った、

いわゆるつうしょう通称です。

かつて、人は生涯の諸段階で

仮名を変えました。

では、いつものように、

番号順に見ていってね。

史料一

毛利元就仮名書出

(当館蔵)

児玉家文書

毛利元就

元就
月

元就

毛利元就

まず、史料しりようーのくずし字を

漢字とかなに直すと、

Aのようになります。

たいえい

大永六年（1526）八月一日に、

もうり もとなり

こだま さえもん たらう

毛利元就が児玉左衛門太郎に対し、

しろう ひようえ

「四郎兵衛」という仮名を

与えたものです。



A 今の漢字とかなに直したら・・・

四郎兵衛

大永六年

八月一日

元就（花押）

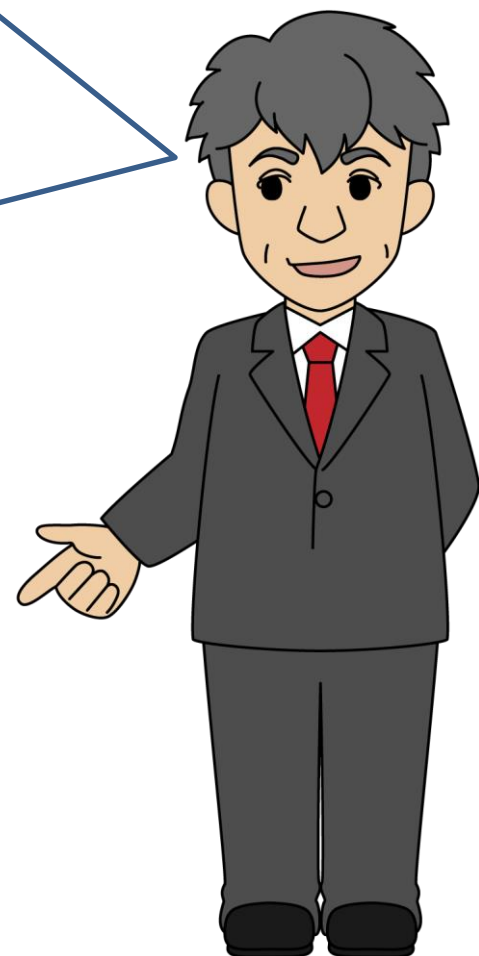
児玉左衛門太郎とのへ

用紙の上半分しか
使っていないのね。

よく見ると、

真ん中に折り目があるよ。





いいところに気が付いたね！
ようし
用紙には、大きく次の三通りの
しようほうほう
使用方法がありました。

- (1) そのままの大きさで使用。
- (2) はんぶんお
半分に折って使用
- (3) (1)・(2)の紙をかみ
を切って使用

④

(1) を^{たてがみ} 豎紙、

(2) を^{おりがみ} 折紙

(3) を^{きりがみ} 切紙

と、^よ 呼びます。

(1) の 豎紙 が ^{もつと} 最も ^{ていねい} 丁寧で、

(2) ↓ (3) となるほど、^{そりやく} 疎略 になります。

じゃあ、史料―は、
(2)の折紙おりがみじゃね！

仮名けみようを与あたえるときには、
いつも折紙を使うの？



⑥



そうでもないんよ。

次の史料2は、

(1)のたてがみ縦紙を使っています。

また、

史料3は、(3)のきりがみ切紙に見えるけど、

実際は(2)のおりがみ折紙で、

かんす卷子にするときに

下半分を切ったんじゃない。

任 任

永禄 八年 六月 廿一日

永禄八年六月廿一日

輝元 (花押)

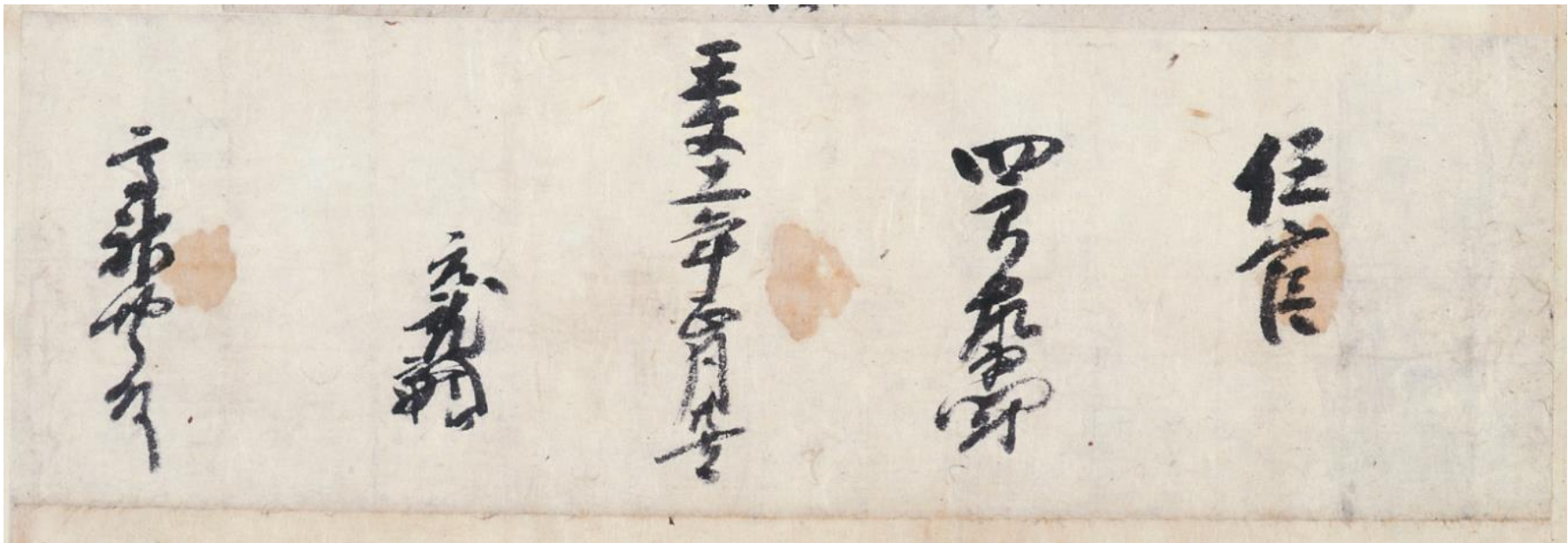
輝元

又右衛門尉

又右衛門尉

高神四郎とのへ

高神四郎とのへ



高神四郎殿	元就(花押)	天文十一年正月廿七日	四郎左衛門尉	任官
-------	--------	------------	--------	----

史料2は、

永禄八年（1565）六月二十一日に

史料1の毛利元就もうりもとなり まごの孫の輝元てるもとが

高神四郎こうしんしろうに「又右衛門尉また え もんのじょう」という

仮名けみょうを与えたものです。

史料3は、

天文十一年（1542）正月二十七日に

毛利元就が高神四郎

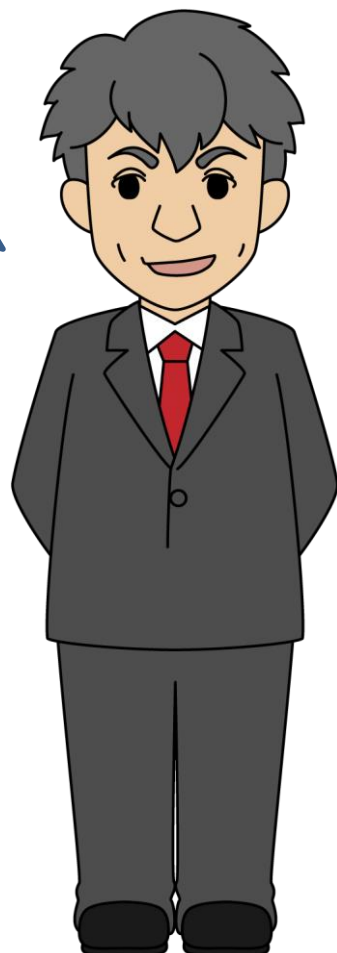
（史料2の高神四郎の父）に

「四郎左衛門尉しろう さえ もんのじょう」という仮名を

与えたものです。

(1)の縦紙を使っている史料2が
最も丁寧なんじゃないか！
じゃあ、史料1と史料3は
どっちが丁寧か、分かるん？





史料一と史料三を見比べて、
 ちが
 どこが違うか分かる？
 わ
 その違いから、
 けみようかきだし ていねい
 どちらの仮名書出が丁寧か分かるよ。

仮名だけなのが史料Ⅰ、

仮名の前に「任官」とあるのが史料Ⅲ。

年号が日付の右上に付くのが史料Ⅰ、
年月日が行に書かれるのが史料Ⅲ。

宛名の敬称が、史料Ⅰは「とのへ」、
史料Ⅲは「殿」と漢字で記される。



史料 1

(なし)

平吉勝

付年号

八月

元就

史記

とのへ

史料 3

任官

四ノ巻

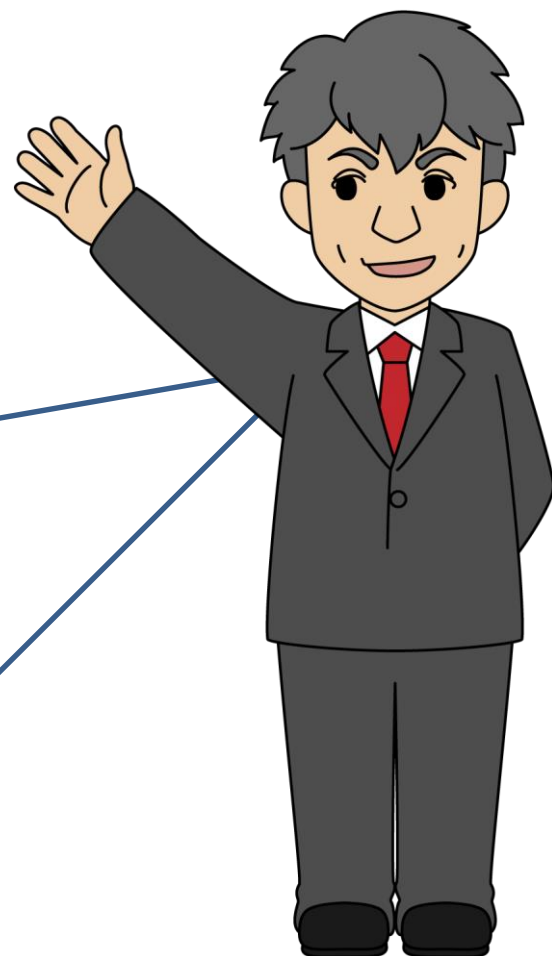
書き下し年号

壬午年

元就

史記

殿



ひづけ

日付の右上に付けた年号を、

つけねんごう

「付年号」と言います。

年月日を一行に書いた年号を、

か くだ ねんごう

「書き下し年号」と言います。

「付年号」よりも

ていねい

「書き下し年号」の方が丁寧です。

宛名^{あてな}の敬称^{けいしょう}は、

「とのへ」よりも

「殿」の方が丁寧^{ていねい}って、

足利義昭^{あしかがよしあき}の御内書^{ごないしょ}

(『中世文書を読む』第10回)

のときに習^{なら}ったわ。





ということは、

史料1よりも史料3の方が丁寧で、

ていねい

史料2↓史料3↓史料1の順に

そりやく

疎略になつとるんじゃないね！

御名答！

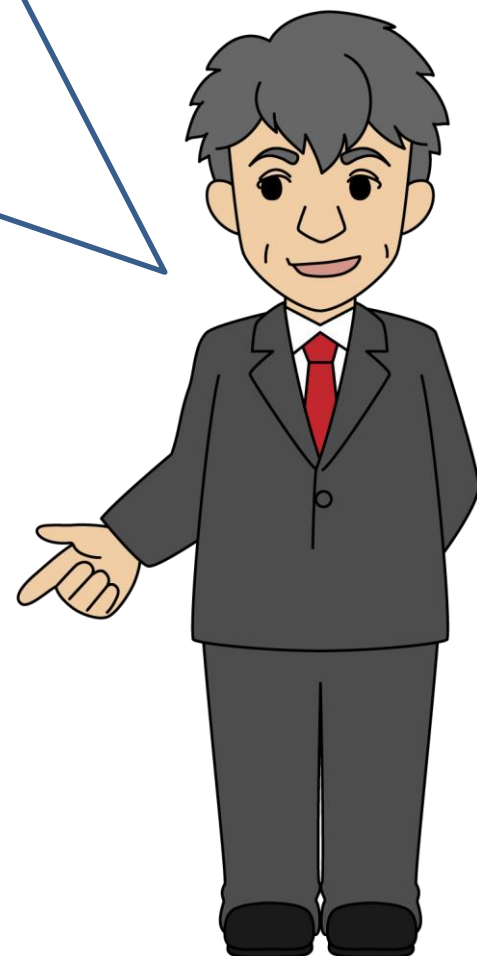
このほかにも、

差出人と受取人（宛名）の
さしだしにん うけとり にん あて な
名前が

書かれた位置関係からも、
い ち かんけい

厚礼と薄礼、丁寧と疎略を
こうれい はくれい ていねい そりやく

うかがうことができます。



たてがみ

豎紙や書き下し年号の使用から

ていねい

最も丁寧とされた史料2ですが、

うけとりにな

こうしんしろう

受取人「高神四郎」の文字は

さしだしにん

てるもと

差出人「輝元」よりも小さく、

ひく

いち

少し低い位置から書かれています。

いっぽう

おりがみ

一方、折紙の使用などから

そりやく

最も疎略とされた史料1では、

こだま さえもん たろう

受取人「児玉左衛門太郎」の文字は

もとなり

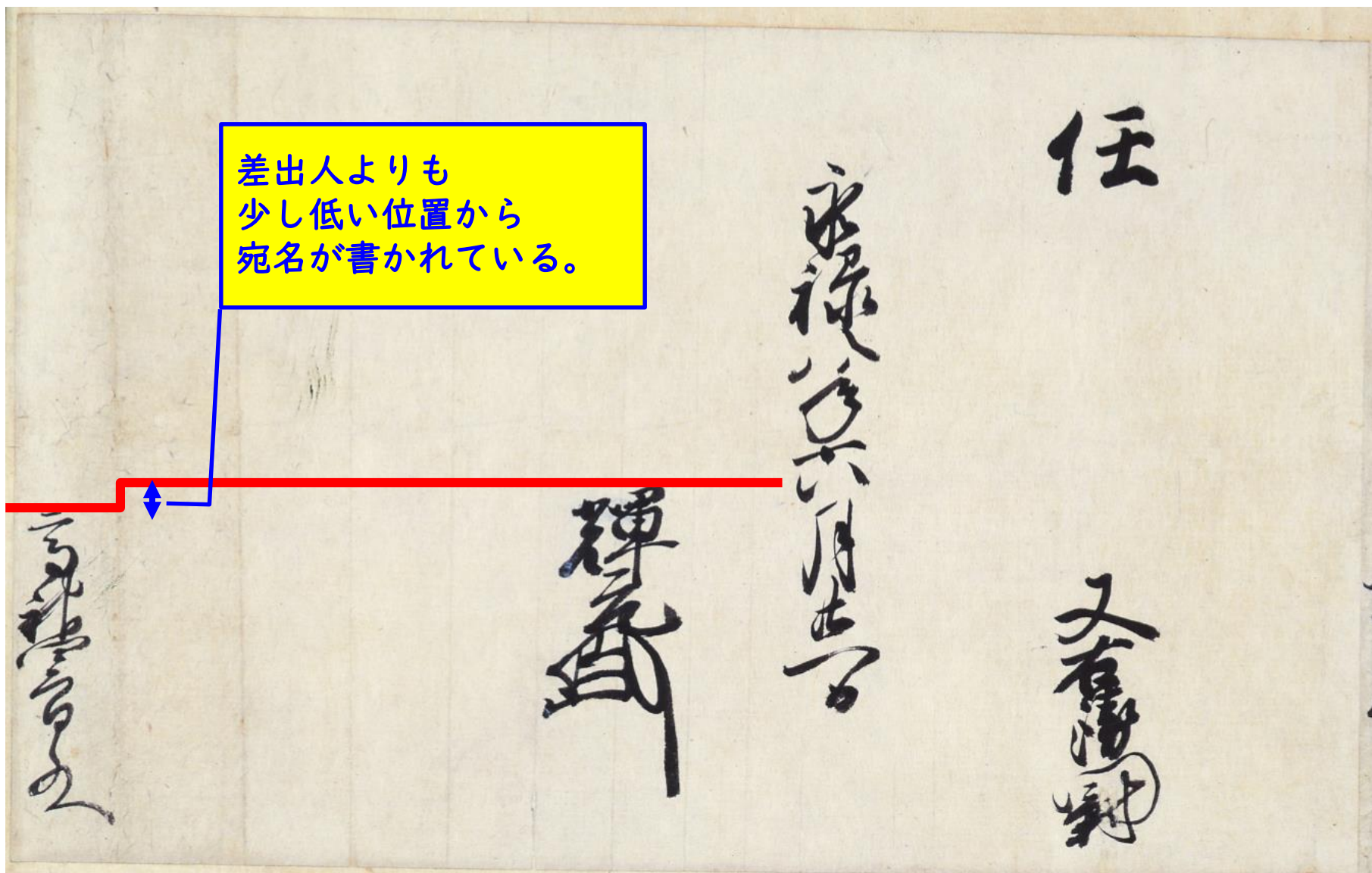
差出人「元就」よりも

少し小さいですが、

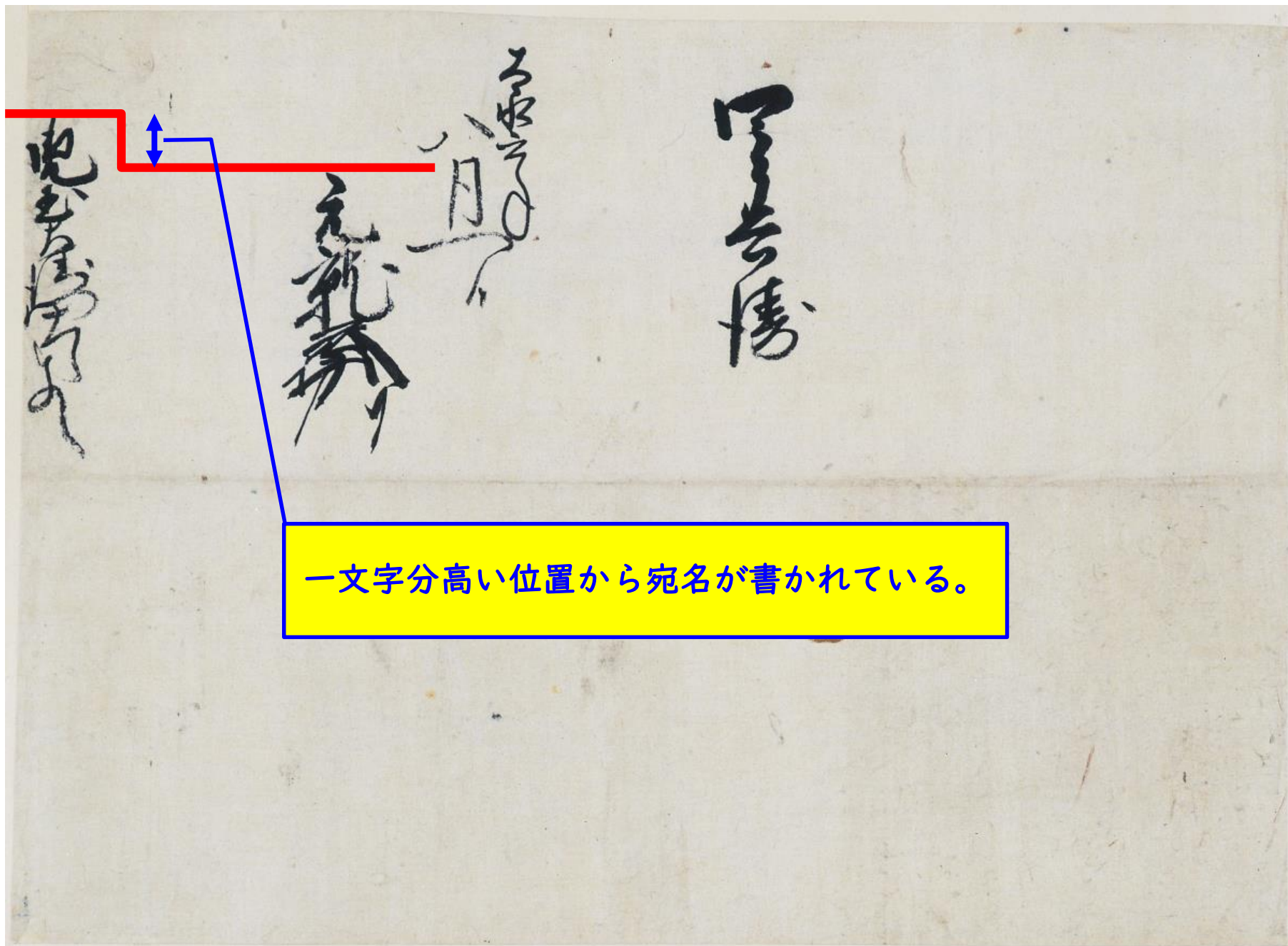
いち も じ ぶん

一文字分高い位置から書かれています。

史料2の差出人と受取人の位置



史料1の差出人と受取人の位置



史料3も、

受取人「高神四郎」の文字は

差出人「元就」よりも、

一文字以上高い位置から書かれ、

両者の文字の大きさも同じくらいです。

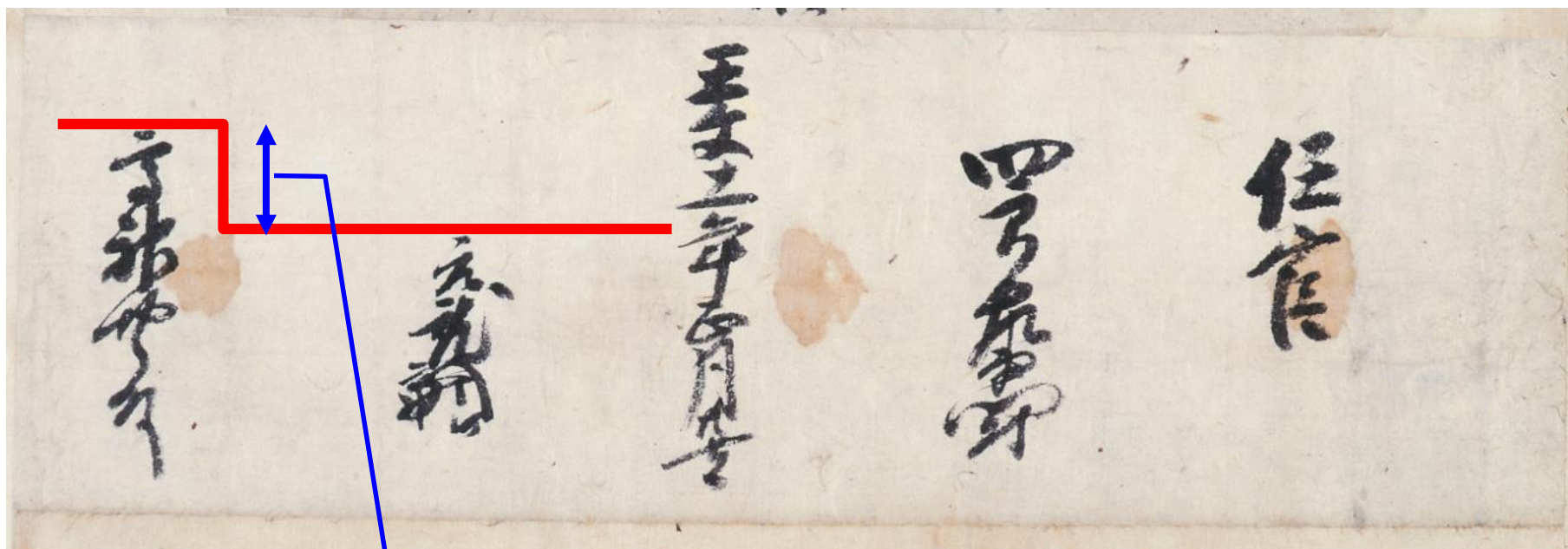
用紙だけを見れば、

史料2が最も丁寧な対応に見えても、
ていねい

差出人と受取人との位置関係からは、

史料2が最も薄礼はくれいと言えます。

史料3の差出人と受取人の位置



一文字以上高い位置から宛名が書かれている。



けみようかきだし
 仮名書出の書かれた年代差や、
 ねんだいさ
 書いた元就と輝元の立場の違いが、
 もとなり
 てるもと
 たちば
 ちが
 三つの史料に表れているのかしら？



いいところに気が付いたね！

史料１と３は、

毛利氏が安芸国のこくじん国人・くにしゅう国衆と

呼ばれた時期のもの。

史料２は、

毛利氏が戦国大名としてせんごくだいまみょう

大内氏を滅ぼし、おおうちし
ほろ

間もなくあまごし尼子氏も倒すたお時期のもの。

略年表

和暦	西暦	出来事など
大永3年	1523	毛利元就が家督を相続する。
大永6年	1526	毛利元就が児玉左衛門太郎に「四郎兵衛」の仮名を与える。 史料1
天文9年	1540	出雲国の尼子氏が毛利氏の本拠吉田を攻撃する。（郡山合戦）
天文10年	1541	毛利氏が大内氏や国人たちの協力を得て尼子氏を敗走させる。
天文11年	1542	毛利元就が高神四郎を「四郎左衛門尉」に任じる。 史料3
天文15年	1546	元就の長男の隆元が毛利氏の家督を相続する。
天文24年	1555	毛利氏が厳島で陶隆房を始めとする大内軍を破る。（厳島合戦）
弘治3年	1557	大内氏が滅亡する。
永禄6年	1563	毛利隆元が急死する。
永禄8年	1565	隆元の長男の輝元が毛利氏の家督を相続する。
永禄9年	1566	毛利輝元が高神四郎を「又右衛門尉」に任じる。 史料2
		尼子氏が滅亡する。

こうした毛利氏の立場の違ちがいが、
 これらの仮名書出にも反映はんえいされている
 のではないでしょうか。

国人・国衆こくじん くにしゅうとして活動した元就と、

戦国大名毛利氏を相続そうぞくした輝元では、
 家臣かしんへの対応方法に差ができました。

輝元は元就に比べ、
くら

いわば家臣を疎略そりやく・薄礼はくれいに扱あつかい、

相対的に尊大化そんたいかしたのです。